

墨香淨土組香茶湯記

多 9

1.338

15

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20

門多
號 1338
卷 15

墨香淨土組香茶之湯記



あしきまきけ 弁學人のあやしきもの 博者
しーのわきまのしーのわきまのしーのわきまの
しーのわきまのしーのわきまのしーのわきまの
あしきまきけ 弁學人のあやしきもの 博者
しーのわきまのしーのわきまのしーのわきまの
あしきまきけ 弁學人のあやしきもの 博者

くらゝのさかきもこころをさかして
 井よ香のよの湯とて来りててつと
 まき 終るんや 冬月二日とて 朝大人のま
 よま 墨香洋とてつとまのまをむら
 りて くらゝはくのみなつとまをむら
 りて くらゝはくのみなつとまをむら
 のま 終るんや 冬月二日とて 朝大人のま

くらゝのさかきもこころをさかして
 井よ香のよの湯とて来りててつと
 まき 終るんや 冬月二日とて 朝大人のま
 よま 墨香洋とてつとまのまをむら
 りて くらゝはくのみなつとまをむら
 りて くらゝはくのみなつとまをむら
 のま 終るんや 冬月二日とて 朝大人のま

せん人よまのの平一をさかして

秋のひらきももはるるの
色も香もまゝ秋のまじりこ
しりひらきもまゝまじりこ

小舟のまじりこしり檣のまじりこ
しりひらきもまゝまじりこ

正意

七月二日朝組香之茶湯

主 松岡大記

客 真念寺月将

千田鷗次郎

宗原代

村田小助

待合 鏡村書屋標

多 並 益 朝鮮掛紙四方書付あり

烟管 唐山製

室 三通、逆持、墨香津土

一 概物 正親町従一位亞槐公通郷懐紙

・ 姫代々人のちまきとてしるす

・ 多ふくみくまを家のなぐる

床真中
一 香盆

唐物長

香爐 吳河深村滑石三ツ足

香筋立 宣徳雙耳瓶

瓶作 火若、牛香若、四方化、灰押、ね帯、と、所あり

銀と入 金馬香合

炷空入 吳河深村蟹繪深付

皆具一室とてし

一鐵風呂 丸尾

一金 小會流 共蓋

一炭斗 平ふ之 緑金内里地ちき

一小火取 里地金付繪

一御香 三種

但香丸と不用韻蓋と用

料理 角多印形麦 全碗とつ合

汁 草切 川海老

飯 多森

向 豆腐とんく 芥子油

蓋と碗 碗 鉢

中酒 酒盃 燕車象 臺清六心

飯器 香物籠 五鼓瓶

南京蓋物 四君子繪 形也皮付

川菜 之 之 之

南東京海付 三ノキノクダ

吸物 莫大梅 寺ノ者奇

南東京長皿

取肴 肴ノ了

湯羹 及之化

清之徳皿

舌ノ物 味清漬

白ノ菜高皿

菓子 舌燻菓子半

菓子汁

後 以ノ物

中立

筆 宮城所 萩軸

乱筆 研 都府徳尾

小漏 徳研小瓶

みちのく紙のきりよ 浪波香の危しうがきり
河香洛のきりよ あらうきりよ 三草の書しきり
と巻ひ 灰押とあきりよ 乱筆のきりよ 以

おのりしるくあひのひくまひとつるさるる句毎
 のりしるくあひのひくまひとつるさるる句毎
 のりしるくあひのひくまひとつるさるる句毎

流波香けに

女 流波香
 女 流波香
 女 流波香

ちさあ

ちさあ 霞の月

路方

ちさあ 霞の月

化尺

ちさあ 霞の月

月将

ちさあ 霞の月

星群

七月二日

上香 夏翠

一花入

唐屏小瓶

路水空り

花 信州羊の尻

一 永指 朝鮮耳付

一 奈益 志野

一 奈入 瀬下

袋玉免切

一 奈切 奈切

一 奈一 砂浪

一 蓋玉 〰〰〰〰

一 御奈 若表白

田沼清浩

〰〰〰〰 〰〰〰〰 〰〰〰〰 〰〰〰〰

一 掛物 ^{望床}

唐人古画掛物

一 休念 ^言

西武佛掛之

在田先々書
彫之

一 爪呂令 小生敷了運了

後家子 煙草了了了

一 水端

會席、用い、飯器と用い

上、萩鏡茶盃

里町東

柄杓、両茶の伴、坐盃、茶の火持の

赤い玉子

一、中棚たのこ、茶櫃、盆の伴

硯

ふち、茶櫃、茶の

唐研

茶櫃、茶の

墨

茶櫃

手洗

古洞、茶の

筆筒

古洞

詩箋

盃の取、古洞の水、中盃と玉子

右のこ

青磁、耳付の玉子、黄拓、楊と柳

たゞ右のくみり等

一 撒物 近衛康山公所歌

りほの玉と大まなる

うのうらんとうらな

まの側より住ま嵯峨の船屋の花入とくけり底水

の木槿とこさきこの大江の重剛の船を

よ程丹と結すく返りくくあまの借り

いつまのん尺とまきや出るとまき

うはきううやまつくまのあめ

まのあまの心とまのあまの心

待合のきまめとまのあまの心

あしたのあまの心とまのあまの心

例のあまの心とまのあまの心

あまのあまの心とまのあまの心

よりのこもる居金もまおのりしにひらきし
良秋ののこしつゆりまのつ原もはかまを
中よりまきよよこそあまぬもき 敬禮のりき
のこもるおのつしつゆりまのつ原もはかまを
一まなまきよよこそあまぬもき 敬禮のりき
硯りおろしつゆりまのつ原もはかまを
りて出る居金もまおのりしにひらきし

よ

田中お相もまおのりしにひらきし

お神のたまはちつしつゆりまのつ原もはかまを

いふかお相もまおのりしにひらきし

法師のたまはちつしつゆりまのつ原もはかまを

宮川の市のまのいしつ山法師のたまはちつしつ

あいの集本こころかつしつしん

すのきぬしよるは

なまきしぬたよしやふぬ正意

つらぬあかるかりさき

老ぬかきしりて

今よききんまよ白髪と月将

あしきぬしやうけり

驛海のうぬかよ心し

胸白く口のねとまじき旅方

尚ほしる牝馬よあはれ

引かて馬とくも清水も

山奥を相りぬし

やこまふなまき山くりし良秋

さぬまきぬし

かよきぬし

おののしとをまのてつげもまの 夏琴
いよま直は枕さくいり
何のきり松丘は枕さくいり古徳を
をわらへる
いしくおのいしくまのしつと良秋の
等まのてつげもまの
りまのり人ぬり

天保十一庚子七月二日

坐立山人 月将 伝



市に月一 朔 懐 養 ますくくむく茶の
湯さる香のつさるもろくは 活 養生 健 疾
野の女千代の伝より三種の名香を
をい 御傳の連歌をさるくく

流るる水は河津のぬきより多岐のまじり
 うらつらつと見えぬ春の峰のまじり
 すむ人のまじりなまじりなまじりなまじり
 家もまじりなまじりなまじりなまじり
 暖るよこし菜の花と見ゆ子子
 さきの林とあつむやうなぬ
 木の葉もまじりなまじりなまじりなまじり

まじりなまじりなまじりなまじり
 子代の松尾

大江 奎剛

上



